

天帝の排球

minmin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王者白鳥沢の1年生キャプテン……一体何者なんだ……!?

目次

負けても楽しければいいなど弱者の言い訳だよ

負けても楽しければいいなど弱者の言い訳だよ

「……………え？」

ドリンクの準備やその他雑用をしていた1年が小さく漏らす。声のした方を見やると手が止まっている。いくら相手が王者白鳥沢で、勝ち目が低い試合でも、サボっていい理由にはならねえよ——そう叱ろうととして、思わず自分も固まってしまった。

「どういうことだ……………？主将が、ウシワカじゃなくて、あの、アイツなのか？多分1年だよな、アレ……………」

背番号10を付けている赤みがかった髪が特徴的な男。身長は170そこそこだろう。特に高いというわけでもない。バレーボールという競技の平均から考えると、むしろ低いと言ってもいいくらいだ。体つきも至って普通。それなりに鍛えてはいるのだろうが、筋骨隆々ではない。一見して、特別なものは何もない。

「でも、なんていうか、その、普通、つすね……………」

固まった1年が再起動しつつ首を傾げる。

「何言ってるんだ！焼くぞ。むしろ異常だろうが」

そうだ、絶対におかしい。白鳥沢のメンバー全員が、普通にしていることがおかしいのだ。

「今年入ったばかりの1年が、あのウシワカから主将を奪ったってのか？どんな凄いやつでもありえねえぞ、そんなの。しかも、そのウシワカを含めてチーム全体がそれを全く不満に思ってるねえ。まるで当たり前前みたいに……………」

「た、確かに……………」

「少なくとも。あんなに自然に人を従わせる人間を普通、とは言わねえよ」

一体、何者なんだ。あの10番は——。

——10分後。

こちらのサーブで始まった試合。どうやらあの10番はセッターらしい。こちらの主将のジャンプサーブはアツサリとレシーブされ、そして――

無駄な動きが一切ない、完璧という言葉がこれ以上ないほど似合う優雅なトス。10番がセットしたボールは、空中で一瞬静かに止まり。ほぼ同時に、飛び込んできたウシワカがこちらのコートにスパイクを叩き込んでいた。

「今、のは……」

声が震える。何だ今のは。空中で止まるトスも、あの速攻も。烏野の影山とチビの10番だからこそその技じやなかったのか。それを、あもも簡単に。しかも、決めるのはあのウシワカだなんて。

「アカシー！ ナイストス！」

白鳥沢の面々が口々に10番に声をかける。アカシ、と呼ばれた男は、涼しい顔のまま口を開いた。

「……王者とは、勝ち続けるから王者。負けても楽しければいいなど弱者の言い訳だよ」

怖い。身体の芯から震えがくる。この男が、目の前のナニカが、心の底から恐ろしくてたまらない。

「宣言しよう。君たちはもう点を取ることはない。さあ――蹂躪だ」